

ソウルから東へ、漢江(ハンガン)を百キロほど遡った溪谷に位置する春川市は、日本では長野あたりの霧ヶ谷の緑豊かな落ち着いた町である。日本でも大変なヒットとなった「冬のソナタ」のロケ地、町はずれの川の中州にある並木道はいまや人気の観光スポットである。この町を会場に「ワールド・レジャー機構」が二年置きに世界各地で開催する「ワールド・レジャー総会」が八月二十八日から九月二日まで市の高台にある江原大学を会場に開かれた。筆者(蘭田)と宮入恭平会員は後半の三日間、大学での研究セッションに参加し、また、湖畔の競技場で同時に開催されていた「ワールド・レジャー展示会」を訪ね、水上スキーやパラグライダーのデモを見物、レジャー関連のグッズや活動紹介のコーナーを視察してきた。韓国も日本並

**春川(チュンチョン)の夏の夜の夢**  
 世界レジャー総会で得た  
 新しい課題  
 蘭田碩哉

みの猛暑で、おまけに日本を外して韓国まで追いかけてきた台風に遭遇するなど、天気は散々だったが、ハンブルの洪水の中で英語と悪戦苦闘の揚げ句、新たな多くの余暇研究者と知りあい、美味しい韓国料理とマッコリの酔いを楽しんだ。筆者はこのコングレスへの参加は初めてだが、欧米のレジャー研究者の「総会」という触れ込みにふさわしく、その規模には圧倒された。研究大会は正味五日間だが、中三日間は連日冒頭に各国を代表するレジャー学者のキーノートスピーチがあり、ついでポスターセッション、研究セッションが続く。研究セッションは四日間で九つあり、それぞれが十程度のパートに分かれ、各パートには三〜四人の研究者が配されて発表と討議を行う。今回の全体のテーマは「レジャーとアイデンティティ」だが、各セッションはそれぞれにレジャーの理論や政策論、産業論や活動論など、あらゆる角度からレジャーに迫っていた。

われわれは「マクドナルド化」を論じて著名なジョージ・リッツァー教授キーノートスピーチを聴いたが、マクドナルダイゼーションをレジャーに応用して論じられたもので、パラソルが整然と並びゾートのビーチ風景など印象的な映像に助けられ、分かりやすかった。



写真・左から筆者、一人おいて崔教授、台湾芸術大の劉副教授

宮入会員は「レジャーとツーリズム」と題されたセッションに参加、埼玉のジョン・レノン・ミュージアムの失敗を巡るレポートを、動画と音楽を巧みに組み合わせで発表した。このセッションの相手はアリゾナ大学の教授で、宗教と観光の話を持ち出し、インドの寺院を訪れる観光客の行動を信徒別に分類したりしていた。

さて、今回のメインの課題は、この冬の劉震龍教授の来日以来、関わりの出来た韓国余暇文化学会との共同セッションの実施であった。この企画が最終的にまとったのは訪韓直前で、公式プログラムに載せることはできなかったが、会場には韓国学会の研究者が学生を含めて十数人集まり、なかなか活気のあるセッションとなった。筆者は一番手としてまず以前の晩に特訓した韓国語で挨拶(分かってもらった証拠に拍手が出た)、ついWork and Leisure in Japanと題して発表した。パワーポイントで要点を紹介しながら、日本の近代化と余暇、余暇貧困の現実、今後の課題を話す。拙い英語だが何とか分かってもらえたと思いが、その後の質問がよく理解できない。司会者のS君氏に応援されながら何とか凌ぐ。宮入氏が後を受け、日本の余暇研究史をテキストも用意して丁寧に語る。次にソウル総合技術大学の崔碩浩教授が韓国の余暇市場分析を行い、数字を示しながら何となく凌ぐ。宮入氏が後を受け、日本の余暇研究史をテキストも用意して丁寧に語る。次にソウル総合技術大学の崔碩浩教授が韓国の余暇市場分析を行い、数字を示しながら何となく凌ぐ。

今回の余暇研究史をテキストも用意して丁寧に語る。次にソウル総合技術大学の崔碩浩教授が韓国の余暇市場分析を行い、数字を示しながら何となく凌ぐ。宮入氏が後を受け、日本の余暇研究史をテキストも用意して丁寧に語る。次にソウル総合技術大学の崔碩浩教授が韓国の余暇市場分析を行い、数字を示しながら何となく凌ぐ。

**2010年度  
第14回日本余暇学会  
研究大会開催**

発行所 日本余暇学会 発行人 蘭田碩哉 発行日 平成二十二年十一月一日

**日本余暇学会ニュース**

第72号

日本余暇学会事務局  
 〒191-0016 日野市神明1-13-1  
 実践女子短期大学 生活福祉学科蘭田研究室  
 Tel/FAX 042-584-5428  
 e-mail info@yokagakkai.jp  
 Home Page http://www.yokagakkai.jp/  
 編集人: 山田貴史



今回の研究大会は、ツーリズム学会と初の共催で、十月一六日、一七日の両日、信州短期大学(長野県佐久市)で開催された。佐久市はこれまで開催された地方の会場では、最も小さな市であり、しかも奥まった位置にあるという印象がある。事実、東京からは新幹線で一時間二〇分の距離だが、名古屋

や関西からは交通の便に恵まれているとはいえない。そのため心配があつたが、日本余暇学会二〇名、ツーリズム学会七名、非会員一名、合計二八名の参加があり、まずまず大会としての形はついたと考えている。佐久も天候異変で妙に暖かい不順な天候が続いていた。しかし、当日は久しぶりの秋晴れ、浅間山、蓼科山、

**ツーリズム学会と  
共催  
~秋晴れの佐久平で~**

八ヶ岳など佐久平を囲む名峰が皆さんを歓迎しているようであった。初日は理事会、総会に続いて、研究発表が行われ十人の発表があつた。また、蘭田会長の発案・コーディネートで全体会「余暇研究のあらたな地平へ」が開かれたが、逆に少人数の強みを発揮して、活発な討論が行われ大いに有意義な場となった。夜は二三名の参加で懇親会、その後、二次会、三次会と流れていった。



セーラさんはこれまでの案内でお知らせのように、北信州・小布と題するパネルディスカッションが、セーラさんを中心に佐々木雅紀氏(ツーリズム学会)、下島康史氏(日本余暇学会)の三人で、下島氏の名コーディネートの下、活発に展開された。

は、したくないから」という信念と、五〇年百年先を見据えた精力的な活動には、全員が驚かされ、いたく感銘を受けた。より詳細は次号の『余暇学研究』に掲載する予定である。今回の大会テーマを「余暇と地域文化」としたのは、テーマの重要性と共に各地から来ていた参加者の皆様に、佐久・信州の地域文化に触れていただくきっかけからである。(実行委員長 中藤保則)

